

<原著>

オルテガ社会思想における大衆とエリート
—オセース・ゴライスの見解—

長谷川 高 生

Masses and Elites in the Ortega's Social Thought - A Study of Osés Gorraiz -

Kosei HASEGAWA

*In this paper, I try to elucidate both the concepts of mass and elite in Ortega's theory of mass society. Particularly I will put focus on his famous work, "The Revolt of the Masses" published in 1930, which Osés Gorraiz, J.M., a Spanish sociologist, had analyzed in detail. Osés Gorraiz made an exhaustive study of contents of both the masses and elites, that is, selected minorities in this book. And he finally completed a definite schema of the masses and minorities in Ortega's history, sociology and politics. Selected minorities are distinguished by being energetic, vigorous, and having a higher ideal-oriented life, activated by effort and exercises, and so on. In contrast to these traits, the mass-men's personalities are characterized by being spiritless, apathetic, aimless and having an irresponsible life, with a lack of duty and obligation, but insistent on rights, etc. In order to overcome the blockaded conditions of mass society, we should develop brilliant, spiritual cultures in our future.

Key words : masses, minorities, the Revolt of the Masses, Ortega, Osés Gorraiz
(大衆、少数者、大衆の反逆、オルテガ、オセース・ゴライス)

I はじめに

筆者は先の拙論で大衆とエリート、すなわち少数者を橋渡しする歴史的概念として、オルテガ (Ortega y Gasset, J.) の「世代」概念に焦点を当てて分析した¹⁾。そこで本論文では、この「世代」によって繋がれる2つの対極する概念、「大衆」と「エリート」、すなわち「選ばれた少数者」の概念内容を検討しよう。オルテガの社会論・政治論は主に2つの作品、1921年に公開された『無脊椎のスペイン』と1930年に発刊された『大衆の反逆』で述べられているが、とくに後者の著作にお

いては、オルテガの本国スペインに限定されていた前者の視野がヨーロッパ大に拡大されて、彼の大衆社会批判論が展開されている。オルテガの「大衆」概念を検討するとき研究者は通常、後者の『大衆の反逆』でオルテガが記述している大衆人の諸特徴を羅列して「大衆」のその性格を検討する。たとえば筆者の場合、拙著『大衆社会のゆくえ』で大衆人の特色を①「平均性」②「同調性」③「凡俗性」④「伝統の無視」⑤「支配性」⑥「自己満足」⑦「自然人」⑧「野蛮性」などを挙げて、また少数者の特徴を①「緊張」と「鍛錬」の「苦行者」②「自己に多くを課し困難

や義務を負う人間」③「すでに獲得したものを超えて、より優れた新たな規範に奉仕する人間」④「活力に満ちた、規律からなる、高貴な生」などを挙げて検討した²⁾。しかし名著の誉れ高い『大衆の反逆』が含意する深い意味内容を探究するとき、一層詳細に大衆人や少数者の特徴を考察すべき必要性が痛感される。スペインの政治学者サーンチェス・カマラ (Sánchez Cámara, I.) によれば、「エリートと大衆との間の区分の役割はオルテガ社会学理論の全体のなかでは、第二位的というものでは決してなく、いくらその重要性を誇張してもしすぎるものではない」。「オルテガの全社会学はこの区分に依拠しており、この区分を通してその全的・根本的意義を獲得するのである。というのはオルテガの社会学はエリートの理論を通して、人間学と現実の一般概念化に基礎づけられているからである」³⁾。そこで本論では、この『大衆の反逆』における「大衆」の概念内容と、それに対置される「エリート」、すなわち「選ばれた少数者」の概念の内実を、これらを網羅的に分析したスペインの社会学者オセース・ゴライス (Osés Gorraiz, J.M.) の研究に焦点を当てて、考察してみたい⁴⁾。

II エリート論におけるオルテガの位置

オルテガの大衆社会批判論はもちろん、「現代の大衆」を考察対象、批判対象としている。近年、日本で大衆社会への批判論を展開してきた西部邁氏によれば、大衆批判はバーク (Burke, E.) やトクヴィル (Tocqueville, C.A.H.C.) などの貴族主義者による批判、フロム (Fromm, E.)、リースマン (Riesman, D.) やミルズ (Mills, C.W.) などの民主主義者による批判、オルテガに代表される精神主義者による批判というように、3区分される⁵⁾。

筆者は拙著でこうした大衆社会論に対極するエリート論の立場をモスカ (Mosca, G.)、パレート (Pareto, V.F.D.)、ミヘルス (Michels, R.) の古典的エリート論、シュンペーター (Shumpeter, J.A.)、ミルズの現代のエリート論、ウェーバー (Weber, M.)、オルテガの精神主義のエリート論というように3分類したが、これは以下に述べるサーンチェス・カマラとほぼ同じ分類である⁶⁾。

サーンチェス・カマラによれば、歴史上、「これまでエリート論が形成してきた全理論を体系的に統一把握することは容易なことではない」。それらの理論すべてによって共通して確信され得る唯一のことは、色々なエリート論が何らかの資格のある少数者の存在を前提していることであり、当該の社会のなかで相当程度違った2つのグループ—少数者と多数者—を区別していることである。〈〈エリート (élite)〉〉とは歴史的には、フランス人がその言葉によって〈〈最良の人々 (los mejores)〉〉を想い描いた用語であり、〈〈選ばれた少数者 (minoría selecta)〉〉と同じ意味であり、一つの社会や集団のなかで政治的・経済的・文化的指導の仕事に最もよく適したグループ、あるいは階級を指している。バクラック (Bachrach, P.) によれば、これらの理論の2つの基本的前提は、(1) 大衆の根本的無能力、(2) 不活発で操作しやすいもの、統治能力の欠如した存在としての大衆、である。この前提が結果するところは、エリート論の不可避的な必然性でしかない⁷⁾。マイゼル (Meisel, J.H.) はエリート論を排他的に政治権力の行使の分野に限定して、2つの理念、つまり (1) 少数者が事実上そうしているので統治しなければならないという、さらに (2) 統治する人間は少数であり、多数者は統治しないし決してそうしないという、エリート主義のより赤裸々な見解を提示している。彼に

としてはエリートの統治は、小さな指導グループ、あるいは色々なそうしたグループによる大衆の集団的操作を意味する⁸⁾。さてサーンチェス・カーマラによってもエリート理論はやはり、3つのグループに区分される。それは(1)古典的・伝統的エリート論、(2)現代的・民主的エリート論、(3)大衆社会の批判理論の3つである。これらの理論は共通の傾向や観念が見出され一定の親近性が認められるが、それらの理論の前提のもつ意義はそれぞれ別々であるゆえ、こうした区分は不可避的なものである。

(1) 伝統的エリート論の代表者はモスカ、パレート、ミヘルスである。彼らが懸念するところ、自由と民主主義にとっての危険はエリートの存在とその活動から由来する。彼らは指導するものと指導されるものとの間の絶対的で解決しがたい格差から出発する。このことは同時に、人間や階級、社会グループのあいだでの本質的な不平等性の肯定を前提とし、大衆が自らを統治することの根本的な無能力性を支持することを意味する。彼らにとっては社会活動とは本質的に少数者が不可避的に保有している権力闘争より成立し、その権力は常に少数者のもとにある。さらにその権力は社会秩序の十分ではないが必要条件であり、このことは正当性あるイデオロギーの創造・宣伝を通しての、少数者による大衆の操作を必然的なものにする。しかしこれらの理論においては人間性に関して深いペシミスティックな見解が潜在している。すなわち、気まぐれで受動的で、また指導されることを渴望し、いかなる対価を払っても無限に安全を確保しようと欲している巨大な社会的な大衆に対して否定的に考察しているのである。したがって、これらの知識人の見解は明らかに失意に満ちたものとなって

いる。彼らの大部分は自由主義者か幻滅した民主主義者である。しかし彼らの考察の結果は明白であり、民主主義は結局、不可能であり虚しい幻想なのである。彼らは民主主義を悪として拒否する訳でもなく、民主主義の敵でもない、単に民主主義を不可能と宣言するのみである。民主主義に対して価値判断しようとはせず、民主主義を不適切と宣告するのみである。そしてただただ愚直に冷静に社会的現実を分析しようとし、この分析から民主主義の不可能性を導くのである。それゆえ彼らは現実主義者とかマキアベリストと分類されることもある。また彼らがマルクス主義に反対しているとしても、彼らの理論がマルクス主義に対抗して出現したとはかぎらない。というにはこの流派のいくつかはそれ以前のものである。たとえば、この流派の直接的始祖とされるサン・シモン(Saint-Simon, C.H.R.)は全体社会の2種類のエリートの必然的存在を設定した。それは諸価値に従事する精神的・知的エリートと、地主や実業家によって構成される、物質的財を統制する経済的・物質主義的エリートである。また幾人かの批判者は伝統的エリート主義のなかに、大衆に仮託された、プロレタリアートの社会主義の不可避的な前進を阻止する意図を見ようとするが、これはイデオロギー上の批判に属するものと言えよう。結局、エリートの不可避性と、エリートによる民主主義の妨害ゆえの好ましからざる性格は明白である。したがって伝統的エリート論固有の領域は、政治権力の分野であると言えよう⁹⁾。

(2) 民主的エリート論者の代表者としては、シュンペーター、プラムナッツ(Plamenatz, J.P.)、サルトーリ(Sartori, G.)、コーンハウザー(Kornhauser, W.A.)などが挙げら

れる。この理論全体の主な特徴としては、エリートの存在を民主主義システムの可能性と両立可能とすることである。先の伝統的エリート論との差異としては、①エリートが統一されていないこと、すなわちエリートの多様性を認めること、②操作性の役割が理論の実質を形成するのではなく、第二位に移行したこと、③政治権力の構造が社会階層以外の経路の結果である可能性がなくなったこと、が挙げられる。ここでは民主主義は統治すべき少数者の選出を可能にするシステム以外のものではない。さらにエリートの影響は民主主義体制の存在自体にポジティブ且つ有益である。この流派の幾人かは選挙における一定の棄権率は、棄権者が道徳的に最も無偏見・無知であり、その投票はむしろ邪魔になるゆえ、システムに安定を与えると確信している¹⁰⁾。

(3) 大衆社会の批判者のおもな代表者としては、マンハイム (Mannheim, K.)、シェーラー (Sheler, M.)、リースマン、ミルズ、オルテガを指摘できる。この流派の遠い祖先はギリシア・ローマの古典思想のなかに見出せるが、直前の先行者は自由主義思想の大部分に属する。この流派は伝統的エリート論と異なって、否定的役割をエリートから大衆に移行させる。大衆は文明に危険をもたらし、少数者はその文明のシステムの防衛に努め、民主主義の過剰から自由主義を保護しようとする。この流派の主張はエリートの知的・道徳的優越性の確信に基づいている。すなわち文明と民主主義そのものの危険は、大衆の侵攻と支配から派生し、その救済はすぐれたエリートの側からの慈善家的影響の達成のなかに見出せるのである。この流派には(2)の代表者の幾人かもここに含ませることができるよう

に、3つの流派の間にはもちろん、厳密な境界線は存在しない¹¹⁾。

Ⅲ オルテガによる現象学的分析

こうしたサーンチェス・カーマラによるエリート論の3区分のうち、(3)の大衆社会の批判者として識別されるオルテガは、大衆社会を分析・解明するに際し、起こっている「事象そのもの」に即して考察する現象学的アプローチを、広い意味で、採用している。それは『大衆の反逆』の冒頭の、大衆社会状況という「社会事象」を述べた次の文章を見ても、理解できよう¹²⁾。「大衆の反逆というこの歴史的現象に近づく最良の方法は、おそらく、われわれの視覚的な経験に訴えて、われわれの時代の肉眼で見ることのできる一つの相貌を強調することだろう」。「その事実は分析するのは容易でないが、指摘するだけならきわめて簡単であり、私はそれを密集の事実、『充満』の事実と名づけている。都市は人びとで満ちている。家々は借家人で、ホテルは泊り客で、汽車は旅行客でいっぱいである。喫茶店はお客で、街路は通行人で、有名な医者の待合室は患者であふれている。映画・演劇は、だしものがひどく時期はずれでないかぎり観客で満員となり、海浜には海水浴客がうようよしている。以前にあったは問題にならなかったこと、つまり、あいた場所を見つければということが今ではたえず問題になりはじめているのだ」。「ただそれだけのことである。今日の生活においてこれ以上単純で、容易に目につく、日常的な事柄があるだろうか？ところで、以上観察してきたこの平凡きわまりない事実の表皮に穴をあけてみよう」¹³⁾。

以上のように、オルテガは現象学の理論と実践を認識していた。そこで、(1)『無脊椎のスペイン』(1921)、(2)『現代の課題』

(1923)、(3)『大衆の反逆』(1930)という3冊の作品を通して、オルテガがいかに巧みに現象学的分析のテクニックを特定の諸問題に適用しているのかを確認してみよう。分析すべき社会現象は大衆の蜂起である。当該の現象の解剖を行える概念的装置の事前の準備があってこそ、こうした現象に接近できるのであるが、オルテガの場合は1921年頃にはそうした概念装置をかなり入念に描いており、また1930年には完全にそうした装置を所有していた。すなわち、根源的現実としての生の理論、私と環境との生の仕事の多様性、歴史のなかに働いている生・理性などのオルテガ哲学の中核概念は、当初はスペインの地平で設定されたが後になってヨーロッパのみならず全世界的規模で当てはめられ、具体的事実の分析に支柱として仕えているのである。かくして(1)『無脊椎のスペイン』においては、①指導的少数者の慢性的な欠如、②国を分裂させる世俗的個別主義、③スペイン人を解体させる典型的な非連帯性、(2)『現代の課題』においては、①具体的な歴史的仕事をもった世代、②生の機能としての思考、③明かな衰退にあるヨーロッパ文化、④問題としての生、⑤運命の方位を見失ったヨーロッパ人の無方向性、(3)『大衆の反逆』においては、①公共生活への大衆の突入のデータ、②指導的機能に関しての少数者の放棄、③専門主義の野蛮主義、④民主主義、⑤科学と技術などのすべてのデータが、支柱となるオルテガの哲学的理論の光に照らされて十全な意味を獲得するのである¹⁴⁾。オルテガの行っていることは、われわれに提供されている諸事実の森のなかに存在論(人間論)を挿入することである。オルテガの全哲学が、社会現象が理解されるように、上記の作品に現れているのである。この事情はオルテガの次のような言葉にも表明されている。「産業的・政治的秩序

の変化はそれほど深いものではなく、むしろそれは現代人がもっている観念や道徳的・美的選好に依存している。しかしイデオロギーや好みや道徳性はまた、生を前にしての根源的感覚の結果、もしくは特定化である¹⁵⁾。「生きることは、軍旗のもとでの整列であり、戦いの準備である」¹⁶⁾。「生に捧げることは、これまでは宇宙の偶然事として無意味な事実であったが、これからは原理と法を構成するのである」¹⁷⁾。

さて、もし人間の生の縦糸(構造)が前もって解明されないなら、選ばれた少数者の生のタイプは理解されない。なぜなら、われわれはすべてを知ってはじめて、つまり、知的な生が、①仕事、②継続的に努力すること、③絶えずわれわれの運命を探求すること、④その遂行が危険を伴う未来のプロジェクトを実現することで成立することを知ってはじめて、われわれは選ばれた人間たちの機能について理論化できる、からである。1929年頃にはオルテガは、『哲学とは何か』の名で知られる学術講演で彼の哲学的思想のうち、①個人的仕事としての生、②個人的決断としての生、③永続的危険としての生、④環境内での、そして環境を伴う航海としての生などの《お馴染みの》オルテガの理念を表明していたのである¹⁸⁾。かくしてオルテガはこの講演で、「各人の生のなかで、彼の生の手綱を握ることができる‘私’、すなわち彼の環境を意識している、つまり彼の生の諸可能性の前で責任ある形で行動を開始しなければならないと意識している私」を確立したのである。これに引き換え、大衆は「こうした特徴をもった私として自らを発見しなかつたし、発見することを欲しない人間」なのである¹⁹⁾。以上われわれは、オルテガがスペインとヨーロッパの現実について行ってきた具体的な現象学的分析を基礎とした哲学的地層を定式化してき

た。オルテガは実践的側面を保持するこの哲学的地層を、現象学的理論との戦いのなかで考え出してきたのである²⁰⁾。

IV 大衆と少数者の分析

(1) 少数者の分析

オルテガが歴史を貴族主義的な意味で解釈するならば、模範となる仕事を行う人間の種類を素描しなくてはならない。少数者を定義する諸特徴こそが、オルテガの社会学的諸観念における生の現象学的概念の影響を理解するための鍵となるはずである。オリンジャー(Orringer, N.R.)の主張するところによれば、オルテガの『大衆の反逆』は貴族の概念をめぐって展開された作品である。オリンジャーはこの作品の「明瞭さは、貴族の理念の透明性から生じている」と言う²¹⁾。オセース・ゴライス自身は、しかし、オルテガは選ばれた少数者に関心を寄せてはいるものの、大衆人についての分析の深さから判断すると、選ばれた少数者ではなく大衆人こそが彼の探求の対象であったと考えている²²⁾。

オセース・ゴライスはこの選ばれた人間の諸特徴として次の諸点を挙げている。①「彼は個人主義的存在である」。確かに、人間は大なり小なり個人主義であるが、少数者を特徴づけているのは彼らの価値が他の人々が受け入れている価値や他の人々が営んでいる生のタイプと一致しないということである。このことは彼をその自分の生のプロジェクトを前に押し進めるように戦わせるのである。②「少数者は、一つの純粋な要求のなかで生きている。すなわちより大きな生の完全さ(plenitud vital)への絶えざる情熱のなかで生きている」。そのことは自らを他の人々より価値があると信ずることでもないし、それらの基準が呈示されているという単純な事実

によって、容易に達成されると信じることでもない。大事なことは最終的には、その達成ではなくその仕事のなかで展開された努力である。ここには明らかに仕事としての生の理論の底流(trasfondo)が見られる。プロジェクトたる、この生は少数者をして以下のことを為さしめるのである。③「少数者は彼の理想に永遠に奉仕して生きている」。④「もしその理想を達成してしまったなら、もっと高い他の新しい理想を発見する」。⑤少数者は「絶えざる危険と緊張のなか、絶えまない鍛錬のなか、規律正しい、活動的な生」を生きている。⑥「要するに、少数者個人は自分自身でより高い審判(una instancia superior)を見いだしそれによってそのために生きる人間、つまり苦行者(asceta)である」²³⁾。

以上からして、少数者個人は流れに逆らって生きている(se hace a contra-corriente)と言えるであろう。彼の足どり(su andadura)の始まり、すなわち出立は、彼がその生のプロジェクトにおいて他の人々に一致しないと気づいたとき、生まれるのである。少数者個人は彼の生の理想を引き受けて、それを実行するための諸力を創造していく。思うに、模範的個人は、その仕事のなかで自らを危険にさらし得る増大するエネルギーと自発的で贅沢な力(una energía expansiva, una fuerza espontánea y lujosa)を所有している。確かに、この自由で反功利的で贅沢な衝動は人間をしてだんだんと困難となる仕事を遂行させると同時に、こうした仕事は彼を他の人々のためのモデルに変えるのである²⁴⁾。

オセース・ゴライスは、こうした少数者の特徴を6点に要約している。

第一に、彼は「その概念形成や企図において自由でなくてはならない」。オルテガにとっては自由主義とは、特定の道徳的理想をどんなタイプの功利主義よりも優先させて、その

理想の実現を可能にするものである。しかしながら、オルテガは彼の生涯を経るにしたがい、歴史的諸事件によって迷いを覚まされて、有効な社会理論としての自由主義の価値を懐疑するようになった。

第二に、彼は「根本的に個人主義でなければならない。したがって、彼の個人的プロジェクトを実現することが妨害されてはならないのである」。少数者個人は永遠に彼の特異性、他人と異なる彼の側面を成長せねばならないのである。この個人主義は適度な社会生活を送るために、彼を反社会的にすることもなし、彼を無能にすることもなし。オルテガにとっては個人主義とは、単に個人的な発展を遂行する可能性を意味するのであって、個人とは不可避的な社会的次元を有するのであり、社会的存在であるがゆえに個人なのである。

第三に、「オルテガによれば、すべての悪に対する解決策は文化のなかにあるゆえに」、彼は「教養があらねばならない」。変化は文化の増大によって始まらねばならない。それが実質的な改革である。根本的にはオセース・ゴライスの考えるところ、オルテガの少数者は基本的には、スペインとヨーロッパの社会的現実とかかわり合いにならねばならない知識人たち全体に還元される。その政治的文書のなかでオルテガは、再生主義者の計画の手綱を掌握するよう、スペイン知識人に絶えざる要求を行っている。

第四に、彼は「彼の使命を明確にもち、それを廃棄してはならない」。大衆の反逆は、人民投票主義 (plebeyismo)、すなわち少数者が時々採用する、自らの機能を廃棄しその義務を果たさないという態度の病理によって理解される。大衆と少数者の弁証法的関係においては、その決裂は2つのどちらの側からも到来し得るが、オルテガの目からは少数者

の背信の方がはるかに一層嘆かわしい。道標 (みちしるべ) が消えたとき、すべては成りゆきまかせとなる (toda va a la deriva)。スペインが受けている積年の悪徳はそのようなものである。

第五に、彼は「他の人々を上回る彼の優秀さを、専ら生の道徳的・精神的諸価値に基礎づけなければならない」。大衆は、少数者諸個人に生のそのような質を見るゆえに、彼らを指導的少数者とみなす。この意味で少数者であることは、2つの要件を求めるものである。すなわち幾人かの人々にとっては、彼らが他人と異なり、勇敢で、頑丈であるという要件であり、多くの人々にとっては、彼らを社会の指導的地位に置くという要件である。というのは諸個人は大衆の支持なくしては何物でもないからである。ここから少数者が命令し大衆は服従するのは当然であることになる。もし2つの機能が正しく実行されるなら、社会は提起されている諸問題を調和的に克服していくであろう。

第六に、彼は「生の力、組織能力、節度ある行為、見通しの広さに満ちあふれた人間でなくてはならない」。「これらの性格をもつことによって、彼はそれを探求せずとも、選ばれた少数者になる」のである²⁵⁾。

(2) 大衆人の分析

以上、ひとたび選ばれた少数者を特徴づけることができたとすれば、われわれは大衆人の本質についても見るができる。現代の大衆人は19世紀に起源をもつ諸要因の全体の結果である。時代の高さと、大多数の人間が生きている状況とのあいだに存する深淵において、われわれは大衆人の姿をかい間見る。19世紀という時代は、人間の全般的福祉 (豊かさ) に驚異的な前進をもたらした。この豊かさを引き起こした原因は、民主主義システムをもたらした政治的自由主義と、科学の進

歩と技術産業の驚くばかりの発展に基礎づけられた経済的自由主義とであった。この豊かさの具体的・客観的指標としては、①衛生状態の改善、②人間的窮乏に対するより適切な栄養補給、③以前の時代には知られなかった物質的豊かさ、④経済的問題を解決するための前例のない余裕 (holgura) や生活の最大限の快適さ、などである。このことについてオルテガは、「私は大いなる潜在力を自らに感じ、すべての過去を矮小なものとする現代人の、生の基調 (トーン) としての意識を強力に描出したと思っている」と言っているのである²⁶⁾。もしわれわれが、人々の心性の変化を生み出した諸原因をもう少し考察すれば、危険としての生の理論がその企図の基礎にあることがわかるであろう。政治的自由主義が、非常に色々な社会的活動を可能にする生活状況のそのような多種多様性の創造を許したのである。結局、個人的発展の可能性がその諸条件のなかで最大限に達したのである²⁷⁾。自由主義とともに、経済的形態としての資本主義は、科学的発見より派生してきた驚異的な技術的達成から効用、すなわち①大規模な生産、②年少者の労働からの漸進的な解放、③初等教育の実施、④幼少者と高齢者の死亡減少によるヨーロッパ人口のかなりの増大などを引き出し、先例のない豊かさに囲まれた新しい世代が歴史の段階に到達することに貢献したのである。しかしこの事実は事実として肯定すべきことであるが、少しでも油断すれば否定的な方向に向かう危険性をもっているのである。すなわち、『大衆の反逆』のなかで立証された事実は、①世界は人々で満ちていること、②あらゆる分野に大量の男や女が存在していること、③大衆が少し前までは少数者によって占められていた場所を占拠していることなど、④大衆がそうした状況のなかで安楽に感じ、⑤豊かさが彼らの生と不可分

のものであると大衆に考えさせ、⑥その安楽をもたらす豊かさを保持するのに大衆は何もしなくもいいという可能性を暗黙のうちに生み出すのである。そして最終的には、大衆はすべては努力し生命を賭けた生の産物であるというパースペクティブを失い、存在しているものは決定的・最終的なものであると考えるに至るのである²⁸⁾。

かくしてオルテガは『大衆の反逆』において、社会学的な分析というよりも心理学的な分析によって、大衆の行動の分析ではなくむしろ、根底においては反リベラルな人間、個性的な生を根源的現実と理解しない人間、自由を永遠の獲物とは理解しない人間であるような、平均人のパーソナリティを描写するのである。オルテガは大衆現象の研究において、量的パースペクティブを用いず質的パースペクティブを採用し、19世紀の自然自発の生産物である大衆を特徴づける一連の心理学的相貌を確立しようとする。『大衆の反逆』を通じてオルテガが提示する中心的な課題の一つは、新しい教育計画を通して大衆人が変革・修正されるかどうかである。大衆は疑いもなく以前よりは豊かであるし、以前よりは大いに一層高貴な魂をもっている。それゆえオルテガは現代の大衆人は大衆と選ばれた少数者との混合物であると言っている。そのような混合物は非常に問題적であるゆえに、西洋文明そのものが危うい状態にあり、大衆がとる方向に依存しているのである²⁹⁾。オルテガの言明するところ、「大衆の反逆は実際、人類の新しい類まれな組織化の移行過程であり得るが、また人間の運命における破局ともなり得る。進歩の現実を否定する理由はないが、進歩が確実であるという概念は修正を要する。もし退化や後退の脅威がないなら、いかなる確実な進歩も発展も存在しないと考えることの方が事実により適合している。生は個

人的なものであれ集団的なものであれ、私的なものであれ歴史的なものであれ、その実体が危険である、宇宙の唯一の実在である。それは有為転変で構成されている。それは厳密に言って、ドラマである」³⁰⁾。ここからわれわれは大衆人が積極的な価値をもち、以前の生の形態に比しては明かな前進を保持しているという認識を得る。しかしその一方で、ドラマとしての生の概念は大衆人がそのパースペクティブを失い、生は作られ与えられるものであり、進歩は時代とともに当然にして確実なものであると考え、それゆえ大衆人は必然的な失敗に陥らざるを得ないとの言明にわれわれを導く。ここにわれわれは心理学的—社会学的分析のなかで現象学的な諸原理が働いているのを見るのである。以下、『大衆の反逆』に沿って、現代の人間の典型にして大衆の反逆の主役たる、大衆人の個性を確定する広範な性格を特徴化する³¹⁾。

そこでオセース・ゴライスはオルテガの言う大衆人の決定的な側面を、その表現されている順序で、徹底的に指摘しようとする。すなわちそれらは、①いくつかの貧弱な抽象概念のうえに急いで創られた一つの人間類型であり、②どこでも同質的・均質的で、③歴史もなければ過去もなく、④仮面と外向きの外見で、⑤《内面》もなく、内心もなく、私自身もなく、⑥いかなる役割も代表する用意があり、⑦すべての権利を所有しているが、いかなる義務ももたず、⑧宇宙的運命をもたず、⑨仕事とすべきプロジェクトを感じもせず所有してもいず、⑩現実やいかなる上級の審判にも閉じられた閉鎖的な人間であり、⑪自分自身に価値をもたず、世間一般と同じであると感じており、⑫何も創造せず、しかし彼らの親は偉大であり、⑬さらなる善の、さらなる悪の純粹の潜在力であり、⑭甘やかされた子供であり、⑮自らに何も要求せず、

いまあるがままで満足しており、⑯外的な必要物にただ反応するだけで、⑰自らを完全と感じ、ただ自分自身にのみ訴え、⑱文明化された世界のまっただなかに現れた原始人であり、⑲何物をも誰をも必要とせず、連帯責任もなく、⑳教養がなく、道理に関心を向けず、㉑議論を受け入れることができず、他人との比較をせず、㉒文化的共存を拒絶し、㉓強いが単純な魂をもち、㉔《満足しきったお坊ちゃん》であり、㉕凡俗であることの権利を宣言し、㉖無道徳ではなく、非道徳であり、㉗直接行動を通して活動する、㉘現代の平均人である³²⁾。

オセース・ゴライスは以上のすべての側面を簡略化して次のように7点に要約している。

第一に、「大衆人は彼らの生の諸欲望を表明し、努力なしでそれらを達成できている」。

第二に、「大衆人は彼の容易な生を可能にしてきた過去に対して本質的に忘恩の態度を示す。彼には、そのことのための歴史的意識もパースペクティブも欠如している」。

第三に、「大衆人は、少数者も少数者より上位にあるいかなる審判も認めない。大衆がすべてであり唯一のものである」。

第四に、「大衆人は、完全に閉じられた、完全な球体である、それゆえ彼は新しい理念、新しい生活形態、新しいプロジェクトを認めない。彼は自分が完全であるという意識をもっている」。

第五に、「大衆人は、その道徳性、その文化、その生に関して完璧だと思っている。それゆえ自分の存在に絶対の自信をもっており、すべての新奇なものに対して自己防衛する」。

第六に、「大衆人は、生は容易であり、豊かさや安楽さはここにあり、すべての人々の手のとどく距離にあると確信している。困難もなければ限界もない。現代は、個人的・集

团的勝利の時代なのである。豊かさは終わりがなく、しかも心配する必要のない自然物なのである」。

第七に、「大衆人は、寛大でもなく他人の見解を傾聴もしない。彼は直接行動によって活動する、すなわちただ単に彼の意見を押しつけ、彼の卑俗な見解に対立するすべてのものを破壊する。それはリベラルな人間に最も正反対のことである。彼はすべての他の人々に生の画一さを主張し、どんな種類の高貴な存在をも荒廃させる人間タイプ（類型）なのである」³³⁾。

(3) 少数者と大衆人の対比

以上、われわれは大衆人を識別し得る十分に完成された一つの図式を手にいれた。われわれが以前に選ばれた少数者について書いたものを比較検討すれば、われわれは両方の側面が絶対的に対立的であり、たぶんそれゆえに相互補完的であることがわかる。したがって両方の対比図式は以下になるろう。

<選ばれた少数者>

1. 彼は個人主義者である。(Individualista.)
2. 彼の生は絶えざる要求である。(Su vida es una exigencia continua.)
3. 彼はいつも上位にある理想を見ている。そして絶えず新しいプロジェクトを発見する。(Siempre mira a ideales superiores. Continuamente inventa nuevos proyectos.)
4. 彼は苦行者である。(Es un asceta.)
5. 彼の生は危険であり、仕事であり、ドラマである。(Su vida es riesgo, quehacer, drama.)
6. 彼の高貴さは彼の努力から結果している。(Su nobleza es resultado de su esfuerzo.)
7. 彼は他人のプロジェクト、他人の高貴な、努力ある生を尊重する。(Respeta

otros proyectos, otras vidas nobles y esforzadas.)

8. 彼はリベラルである。(Es liberal.)
9. 彼は教養があり、最新の情報に通じておこうとしている。(Es culto y preocupado por estar al día.)
10. 彼の力はけっして限定されない規準への奉仕に向かう彼の生にある。(Su fuerza reside en su vida al servicio de metas nunca definitivas.)
11. 彼は獲得されたものは努力の成果であり、もしいつも戦っていないなら失われてしまうという意識をもっている。(Tiene conciencia de que lo conseguido es fruto del esfuerzo y se puede perder si la lucha no es constante.)

<大衆人>

1. 彼は大衆のなかの一般的な、自分を見失った人間である。(Hombre genérico y perdido en la masa.)
2. 彼の生は権利のみを所有し義務を負っていない安易な生である。(Vida fácil, con derechos y sin deberes.)
3. 彼は理想や生のプロジェクトを欠いている。(Carece de ideales y de proyectos vitales.)
4. 彼は甘やかされた子供である。(Es un niño mimado.)
5. 彼の生は受動的で、感化されやすい。(Su vida es pasiva, receptiva.)
6. 彼はいかなる種類の高貴さも拒否し、凡俗さを宣言する。(Rechaza cualquier tipo de nobleza; proclama la vulgaridad.)
7. 彼はいかなる種類の独創性をも壊す。(Arrasa cualquier tipo de originalidad.)
8. 彼は反リベラルである。(Es antiliberal.)
9. 彼は教養がなく、彼の状態から脱出することに関心がない。(Es inculto y sin

preocupación de salir de su estado.)

10. 彼の力は彼と同じような諸個人の大量さにある。(Su fuerza reside en la cantidad de individuos que son como él.)
11. 彼は自分もっているものは自然に与えられ、働くことをやめても決して欠けることはないと信じている³⁴⁾。(Cree que lo que tiene es dado de forma natural y nunca faltará aunque se deje de trabajar.)

以上、大衆人の有り様への接近がひとたびなされると、明かなことは、その人間モデルが西洋の文化と文明の運命を制御する可能性をもっていないということである。その生成・変転において各人間の存在様式が現れる歴史的存在としての人間のモデルは、大衆ではなく選ばれた少数者のモデルと一致した生の一つのタイプを要求するはずである。むしろ大衆人は、真正な人間の対立モデルである。19世紀の自由主義が、完全に自らに対立する生産物を生みだしたことは、逆説的である。人間に提供された20世紀の環境は、その時代の息子であり、気がかりな閉鎖主義をもって現れ、全西洋文化を排除しようとする人間の一つのタイプを生みだしたのである。オセース・ゴライスの見るところ、オルテガは『大衆の反逆』で社会における大衆の行動の分析ではなく、単に直接行動のごとき、行動形態を指摘するのみであり、大衆の行動のなかに深化しようとはせず、大衆人の心理学的分析に限定している。それゆえオセース・ゴライスは以上のように、大衆人と選ばれた少数者とを性格づけたのである³⁵⁾。

結局オルテガによれば、大衆人にしろ選ばれた少数者にしろ、現在その機能を果たしていないのである。大衆の反逆現象は、少数者は模範性の使命を廃棄しているし、大衆が従順ではないところに成立しているのである。

平均人が彼の自然体においてにつかわしくない機能を行うなら、この状況はわれわれをどこに連れて行くのであろうか。オルテガは明らかに、それは破局に向かうと予言している。基本はやはり、模範性と従順さの二項式が正しく機能することにあるのである。エレロによれば、「模範性と従順性との機能的メカニズムは、社会を創造し維持する精神力とは何かを示唆するメリットをもつと同時に、退廃の現象を解明し国家の病理学を例証する」ものなのである³⁶⁾。

それゆえ現代の状況の転換が必要とされ、そうした状況が取消不可能になるまえに、大衆人を改革することが必然とされるのである。こうした必要性のなかで、文化というのが、重要な役割をもってくる。というのは文化は、大衆と少数者とのあいだの社会的相互作用とそれによる社会と個人の完成が生み出される基本的道具であるからである。文化の問題は、①幅広い文化的・教育的行為なくしていかなる深い変化も生みだし得ないということ、②歴史を通してわれわれが貯えてきた文化的資産を保持すること、という二重の意味を含意しているのである³⁷⁾。

V おわりに

以上、筆者は本論ではオルテガの大衆とエリート（少数者）の性格内容をオセース・ゴライスの研究に依拠して、詳細に検討した。サーンチェス・カーマラによれば、この大衆と少数者の二元的構造こそがオルテガの全哲学体系の核心を形成するものなのである。歴史的観点から現代社会を俯瞰すれば、現代は少数者がその責任を放棄し代わって大衆が表舞台に踊り出た時代なのである。それゆえ、ヨーロッパ文明のみならず、地球上のあらゆる国家・文明に広がったこうした大衆社会状

況を克服するためにはオセース・ゴライスが示唆しているように、やはり、文化の増大、すなわち真正な文化思想による救済が必然的に要請されねばならないのではなかろうか。

【註】

- 1) 長谷川高生：オルテガ世代論—歴史社会における時間性に関する一考察—, 近畿医療福祉大学紀要, 9 (1), 25-46, 2008
- 2) 長谷川高生：大衆社会のゆくえ—オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座—, 9-16, 103-108, 205-208, ミネルヴァ書房, 1996
- 3) Sánchez Cámara, I. : La teoría de la minoría selecta en el pensamiento de Ortega y Gasset, 79, Editorial Tecnos, Madrid, 1986
- 4) Osés Gorraiz, J.M. : La sociología en Ortega y Gasset, Editorial Anthropos, Barcelona, 1989
- 5) 西部邁：大衆の病理—袋小路にたちすくむ戦後日本—, 11-21, 日本放送出版協会, 1987
- 6) 前掲拙著, 83-108
- 7) Bachrach, P.:The Theory of Democratic Elitism, A Critique, 2, University Press of America, Lanham, 1980
- 8) Meisel, J.H.:El mito de la clase gobernante, Gaetano Mosca y la élite, 15, Amorrortu editores, Buenos Aires, 1958:Sánchez Cámara, I. : op. cit., 105
* サーンチェス・カーマラによれば、Meisel の概念は、過度に制限的であり、排他的に伝統的エリート主義に傾斜している。
- 9) Sánchez Cámara, I. : op.cit., 106-107
- 10) Ibid., 107-108
- 11) Ibid., 108
- 12) Osés Gorraiz, J.M. : op. cit., 126 : Tuttle, H. N.:The Crowd is Untruth, The Existential Critique of Mass Society in the Thought of Kierkegaard, Nietzsche, Heidegger, and Ortega y Gasset, 145-146, Peter Lang Publishing, New York, 1996
- 13) Ortega y Gasset, J.:La rebelión de las masas, Obras Completas de José Ortega y Gasset, Tomo IV, 143-144, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 桑名一博訳, 大衆の反逆, オルテガ著作集4, 54, 白水社, 1969
- 14) Osés Gorraiz, J.M. : op. cit., 126
- 15) Ortega y Gasset, J. : El tema de nuestro tiempo (1923) , Obras Completas de José Ortega y Gasset, Tomo III, 146, Alianza Editorial, Madrid, 1983; 井上正訳, 現代の課題, オルテガ著作集1, 183, 白水社, 1970
- 16) Ibid., 163; 同上書, 207
- 17) Ibid., 179; 同上書, 232
- 18) Osés Gorraiz, J.M. : op. cit., 127-128
- 19) Monfort Prades, J.M. : Teoría de la cultura y hombre masa en Ortega, San Martín, J., Domingo Moratalla, T. Eds., Las Dimensiones de la Vida Humana, Ortega, Zubiri, Marías y Laín Entralgo, 95-102, 96, Editorial Biblioteca Nueva (Fundación José Ortega y Gasset) , Madrid, 2010
- 20) Osés Gorraiz, J.M. : op. cit., 127-128
- 21) Orringer, N.R. : Ortega y sus fuentes germánicas, 265, Gredos, Madrid, 1979
- 22) Osés Gorraiz, J.M. : op. cit., 149
- 23) Ibid., 149-150
- 24) Ibid., 150;Orringer, N.R.:op. cit., 266* ここに、オリンジャーの見解によれば、オ

ルテガが自然自発的で贅沢な生 (la vida espontánea y lujosa) を、エリート人の属性である強い欲求と苦行生活の側面 (el rasgo de exigencia y ascetismo que competen al hombre-élite) と両立したいとき、出くわす困難がある。確かに、われわれがオルテガがそう言うように、それが一つの事実である言わなければ、少数の人間たちのなかのそのような過多の生の根源は説明されないままである。それゆえオセース・ゴライスは、オルテガの社会的教義が意味をもつために前提とせねばならない、次の4つの《社会的公理 axiomas sociales》を挙げている。

①「すべての組織された社会において、統治者 (los gobernantes) と被統治者 (los gobernados) という2つの区分された人間集団が存在している」ということである。「この事実の射程範囲は普遍的なものである」。

②「少数者なしの大衆 (masa sin minoría)」も、「大衆なしの少数者 (minoría sin masa)」も存在しないし、存在し得ないといことである。「少数者と大衆は、互いに構成しあいそのように機能するように、不可避的にそれらを前提とする現実の2つの必然的な両極 (los dos polos necesarios de realidad) である」。

③社会の2つの構成要素のあいだのこの相互依存性 (interdependencia) は、われわれに「大衆と少数者とのあいだの統合は、自発的に生み出される自然な何かである」という第三の事実をもたらす。自発性 (espontaneidad) は原初的事実であるゆえに、大衆と少数者はお互いに影響しあい、それぞれ果たすべき使命をもっているのである。

④大衆と少数者とは同じように不可欠のものであるけれども、「より価値のある要素は選ばれ

た少数者 (la minoría selecta) であること」は疑い得ない。(Osés Gorraiz, J.M.: op. cit., 128-132)

- 25) Ibid., 152
- 26) Ortega y Gasset, J. : la rebelión de las masas, op. cit., 167; 前掲書, 90
- 27) Osés Gorraiz, J.M. : op. cit., 152-153
- 28) Ibid., 153-154* マタイスによれば、「オルテガは、大衆という概念を大衆人という概念から注意深く区別する。大衆は、たいていして特質を持たないが、しかし正常な平均人、一般人を表わす。彼は自分の分際をわきまえ、自分を励まし刺激してくれる模範的な少数者に喜んで従う。それに反して、大衆人は異常で退廃した人間である」。(A・マタイス/J・マシア：ウナムーノ、オルテガの研究, 245, 以文社, 1975) しかし實際上、オルテガはそれほど厳密には大衆と大衆人を区別しているわけではない。
- 29) Ibid., 154-155
- 30) Ortega y Gasset, J. : la rebelión de las masas, op. cit., 193-194; 前掲書, 128
- 31) Osés Gorraiz, J.M. : op. cit., 156
- 32) Ibid., 156-157
- 33) Ibid., 157-158
- 34) Ibid., 158-159
- 35) Ibid., 159
- 36) Herrero, J. : Ortega y su crítica a la sociedad de masas, Separata de Arbor, revista general de investigación y cultura, 23[159], Madrid, 1975; Osés Gorraiz, J.M. : op. cit., 160
- 37) Osés Gorraiz, J.M. : op. cit., 160* 大衆人とは前例なしの文化的可能性をもった人間であると同時に、絶対的に自分自身のなかに閉じ込められたモナドのごときのものである。こうした矛盾について、セレス・

ガラーンは『大衆の反逆』の中核は、文化の危機であると言っている。「近代文化の実際の形成要因は、純粹理性のプロジェクトそのものである」と。同じ意味でセレス・ガラーンは、大衆の反逆の問題について新しい手法・態度を指し示す。それによれば、「大衆の反逆とは、少数者の離反と多数者の閉鎖主義の問題ではなく、硬直した文化の構造的結果、すなわち人間に対する文化の反逆である」と言うのである。(Osés Gorraiz, J.M. : op. cit., 160 : Cerezo Galán, P. : La voluntad de aventura. Aproximamiento crítico al pensamiento de Ortega y Gasset, 68, 82, Ariel, Barcelona, 1984)